HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリシタン文献の「対ス」について ： 「スピリツアル修行」国字写本の表記に関連して
Author(s)	白井, 純
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 113, 125-140
Issue Date	2004-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34068
Type	departmental bulletin paper
File Information	113_PL125-140.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 113 (2004)

キリシタン文献の「対ス」について
——「スピリツアル修行」国字写本の表記に関連して——

白井　純

1　はじめに
2　国字写本の「為」表記
3　「対ス」周辺の敬語表現の矛盾
4　助動詞「サス」との不安定な承接
5　おわりに

1　はじめに

キリシタン文献の「対ス」は，ニ格・ヘ格に後接して用いられる漢語サ変動詞であるが，日本側文献とは意味が異なり使用頻度も大きく相違する特殊な動詞である。

本稿で扱う天理本「スピリツアル修行」国字写本(以下「国字写本」)は寛永を降らない時期に何らかのローマ字本から転写したものと考えられ，誤表記も含めて漢字表記率の高さが顕著であるが，他の国字版本では平仮名表記される助動詞「(サ)ス」「(ラ)ル」等を「為」「被」として漢字表記した箇所が少なくない[1]。ところが「対セラル」に限ってはサ変動詞であるにも拘わらず「(サ)ス」と同様な「為」を用いた「被為対」という表記がみられる。

---

[1] 国字写本の特徴については石塚・豊島(2000)を参照。なお「スピリツアル修行」には東洋文庫本もあるが，漢字表記率が低いため本稿で扱う問題には直接関係しない。東洋文庫本についても石塚・豊島(1995)に紹介がある。

キリシタン文献の尊敬の「(ラ)ル」は低位の主語を待遇することが殆どだが，「対ス」に代表されるの一字漢語サ変動詞については「ラル」で高位の主語を待遇した箇所が多く，他とは異なった傾向がみられる。また，キリシタン文献の一字漢語サ変動詞に助動詞「サス」が後接した場合に承接の仕方が不安定であることも特徴として指摘される。

本稿は以上より，国字写本の「被為対」という表記は「対セラル」の「セラル」を所謂二重敬語の「セラル」に代わる表現として例外的に解釈することによって出現しており，これはキリシタン文献の編集段階における「対ス」と「サス」との承接方法の不徹底に由来することを主張する。

凡例

凡例は以下とおりである。

- 原文の引用に際し，□は虫損不明箇所，[　]内は本文に補記入された箇所，(　)内は所在箇所である。引用に際しては例示のために下線を付し，ローマ字本は適宜翻字して示した。問題箇所については【　】内に原本の表記を併記した。
- 所在箇所の「o」「r」は表，「u」「v」は裏を表す。「サントスの御作業」の「p」は第一巻，「s」は第二巻を表す。丁数は原則として原文のものだが，「日葡辞書」「日本大文典」について邦訳本の該当箇所を示した。「スピリツアル修行」国字写本の丁数は石塚・豊島(2000)に倣い，開始頁を1丁と数えた。
- 各キリシタン版の略称は，ts＝「スピリツアル修行(国字写本)」，SP＝「スピリツアル修行(ローマ字版本)」，AH＝「天草本平家物語」，AI＝「天草本伊曽保物語」，ST＝「サントスの御作業」，FD＝「ヒイデスの導師」，CM＝「コンテムツスムンヂ(ローマ字本)」，GP＝「ぎやどぺかどる」，CD＝「どちりなきりしたん」，OR＝「おらしよの翻訳」，CK＝「こんてむつすむん地(国字本)」，である。なお，調査資料については後に一括して示した。

2　国字写本の「為」表記

国字写本については石塚・豊島(2000)に主な特徴が紹介されているが，そのなかで同写本の漢字使用率の高さについて「……これは，「被曳」(ひかれ)，「為喜」(よろこばせ)，「被為対」(たいせられ)，「不浅」(あさからず)，「奉

持」(もちたてまつり),「可奉申上ぞ」(まうしあげたてまつるべきぞ)の様に助動詞・補助動詞類を漢字表記しようとする傾向(「ぎやどぺかどる」には皆無)が特に本書後半に強まる事が一因である。」と指摘されている。

本稿はここに挙げられた「被(ル・ラル)」「為(ス・サス)」「不(ズ)」「奉(タテマツル)」のうち「為」に注目したい[2]。以下に国字写本表記とローマ字版本表記とを対応させた全用例を出現順に挙げる。

表1：国字写本の「為」表記

	為含給ふ(ts 7 o 8)	fucumaxetamǒ (SP 89 v 1)
	為着［さ］給ひ(ts 11 u 12)	qixe tatematçuri (SP 93 r 27)
	為味奉り(ts 12 o 2)	agiuauaxetatematçuri (SP 93 v 4)
	為味奉る(ts 18 u 3)	aguiauaxetatematçuru (SP 99 r 18)
	為見給ひし(ts 19 o 12)	mixe tamaixi (SP 100 r 7)
	為知給わん(ts 42 u 5)	xiraxetamauantameni (SP 120 v 1)
○	被為対(ts 46 u 1)	taixerare (SP 125 v 1)
	被［為］召(ts 51 o 2)	mexiidasaruru (SP 131 v 19)
	為着奉りて(ts 52 u6)	qixetate-matçurite (SP 134 v 16)
	為着奉り(ts 55 o5)	qixetatematçuri (SP 138 v 15)
	為持奉り(ts 55 o 7)	motaxetatematçuri (SP 138 v 19)
	為持奉る(ts 55 o 8)	motaxetatematçuru (SP 139 r 1)
	奉為着たる(ts 55 u 1)	qixetatematçuritaru (SP 139 r 11)
	為弁させ給へ(ts 56 o 11)	vaqimayesaxetamai (SP 140 r 7)
	為着給ふへき(ts 56 u 5)	qixetamǒbeqi (SP 140 r 19)
	為受給ふ(ts 58 u 12)	vqesaxetamǒ (SP 143 v 21)
○	被為対(ts 59 o 10)	taixerare (SP 144 r 18)
	為見(ts 60 o 2)	mixe (SP 145 v 7)
	為沈給ふ(ts 64 o 5)	xizumaxetamǒ (SP 151 r 5)
○	被為対(ts 66 u 5)	taixerare (SP 153 v 24)
	為□給ひ(ts 70 u 1)	yorocobaxe tamai (SP 157 v 10)
○	被為対(ts 70 u 6)	taixerare (SP 157 v 17)
	為開給へ(ts 70 u 6)	firacaxetamaye (SP 157 v 20)
○	被為対(ts 73 o 7)	taixerare (SP 160 v 20)

[2]「為」は「タメ」の表記としても同写本中に百数十例ある。

以上24例の内訳は，助動詞「(サ)ス」が併せて18例(16例が「セ」・2例が「サセ」)で，内容は使役が16例で尊敬が2例である(但しts 56 o 11の用例は助動詞サスを二度表記した誤写であろうから参考までに示す。ローマ字本からの翻字に際して，〝vaqimaye〟を「弁ゼ」に読み替えることはないように思う)。

- ●「ス(使役)」：人愛の御処ハ萬事に甘露を為含給ふ(ts 7 o 8)
- ●「サス(使役)」：御身の高大に在す事を為弁させ給へ(ts 56 o 11)
- ●「ス(尊敬)」：悲涙に為沈給ふ御母是を抱き取給わんと(ts 64 o 05)
- ●「サス(尊敬)」：高大成御堪忍を以双ひなき御苦患を為受給ふ燃立御大切に(ts 58 u 12)

したがって「為」表記は専ら「(サ)ス」の漢字表記であると考えてよい。また「被［為］召 (ts 51 o 2)」は何らかの文字を消して「為」を補っており，ローマ字版本の〝mexiidasaruru〟を国字写本で所謂二重敬語に変更したものかもしれない[3]。

ところが○印を付した5例は助動詞「(サ)ス」ではなくすべて「対セラル」即ち「被為対」であり，サ変動詞を「為」で表記する他例がみえないことと併せて，解釈には疑問を呈する必要がある。

- ●願□世界を受返し給ふ量りなき價とし□流し給ふ御□に被為対過し悪の盲目なりし処を赦し給へと謹て頼み奉る(ts 46 u 1)
- ●仰き願くハ御身の難堪御苦痛艱難を請給ふ御大切ニ被為対則其深き御大切の矢やを我等が胸しよふ中に射立いたて給ゐて夫を抜放(ぬぎハナ)し奉らざる様にがらさを与へ給へ(ts 59 o 10)
- ●□に御主天主御身□御子に被為対我等が科を赦し給ひて再ひ犯す間□為に深く罪を嫌ひすざむ心を与へ給へと謹て奉頼あめん(ts 66 u 5)
- ●御身いつ迄も尊まれ給へ是等の御善徳に被為対御身を見知り御□切に存し敬ひ奉るが為に我等が智恵の眼を為開給へ(ts 70 u 6)

---

[3] 石塚・豊島(2000)の指摘するように国字本筆写者はローマ字本からの転写に際して目移りによる脱落や不適切な翻字など様々な誤りを犯している。

●御身に遠ざからする世界の実もなき□みを退け給ひて□御蘇生に被為対御慈悲の上より終ニあ□ま色躰□蘇活を遂(ts 73 o 7)

国字写本の「対セラル」はこのような漢字表記のみであって，平仮名表記がみられない。

なお「ラル」が後接する場合，「対セラル」以外の一字漢語サ変動詞については平仮名表記(うち「罰セラル」が4箇所)され，二字漢語サ変動詞についても20箇所すべてが平仮名表記である。

●一字漢語サ変+「らる」：汝故にくるすに掛られ給ひ我等が科より害せられ給ひ(ts 11 u 12)

●二字漢語サ変+「らる」：天主ばてれ□打擲せられ給ゐ我等が科□御肩に背負ハせ給ひ我等が科によりて疵を蒙り給ひ我等が不□よりて呵責せられ給ふと書給ふ也(ts 11 u 2)

●一字漢語サ変+「被」：新き科を以再ひ我等死罪の決着を不被伏して右の御恩を不奉□様に(ts 58 o 1)【ataraxiqi togauo motte futatabi varera xizaino qetgiacuni fuxerarezu xite miguino govonuo vxinaitatematçurazaru yŏni (SP 142 r 11)】

●二字漢語サ変+「被」：世界の御扶手被□擲給ふ[4]観念の事(ts 53 u 5)【XECAI-NO VONtasuqete chŏchacu xeraretamŏ Medeitaçam no coto. (SP 136 r 1)】

●その他の動詞+「被」：又同敷牛馬を繋ぐあはらやニ御誕生被成し事を始として(ts 15 u 5)

5箇所の「対セラル」については「被為対」という表記をする一方で，4箇所の「害セラル」についてはすべて「害せらる」という表記なのは何故だろうか。国字写本の「被」表記は，尊敬／受身および連用形／連体形すべてに亘っており，これが使い分けに影響したとは考えにくい。また僅か2例ではあるが，一字・二字漢語サ変動詞に「被」が前接した場合には「不被伏」「被□擲給ふ」のようにサ変動詞が省略されている。

---

[4] 虫損箇所はローマ字本との対照により「打」即ち「打擲」と推定される。

表 2 ：助動詞「(サ)ス」および動詞活用語尾の表記

	漢字表記	平仮名表記	無表記
助動詞「(サ)ス」	18	52	
一字漢語サ変＋「らる」 二字漢語サ変＋「らる」	6（すべて「対ス」）	5 20	
一字漢語サ変＋「被」 二字漢語サ変＋「被」 その他の動詞＋「被」		 3	1 1 127

「対ス」を除くサ変動詞とその他の動詞については，「らる」が後接するなら平仮名表記，「被」が後接するなら無表記でほぼ一貫している[5]。したがって「為」表記が専ら助動詞「(サ)ス」の漢字表記であることと併せて，「対セラル」であれば「被対」もしくは「対せらる」という表記がむしろ適当と思われるのである。

以上に検討した「為」及び「被」の表記の傾向からみると，ローマ字本から国字本への翻字の過程で，〝taixeraru〟は一般的に想定されるサ変動詞に助動詞「ラル」が後接したものではなくサ変動詞に助動詞「ス」と助動詞「ラル」が後接した所謂二重敬語として例外的に解釈されていたと考えられるのではないだろうか。こう考えることで，受身の「害セラル」が平仮名表記なのも説明できるだろう。そしてこの例外的な解釈は，次節以降に述べるようにキリシタン文献の編集段階における「対ス」と「サス」の承接方法の不徹底に由来すると考えられるのである。

[5] 助動詞「(ラ)ル」について「被」表記を行う場合は基本的に動詞の活用語尾は表記しない。例外となる 3 例は「其外じゆでいの習ひの如く入るべき程の事を調へ被納め被申たる事を観すべし(ts 68 o 10)」の 1 例のほか，通常返読される「被」が順読となる「深く思ハ被奉ると(ts 34 u 1)」「添被申事(ts 48 u 4)」が 2 例みられるのみである。

3 「対ス」周辺の敬語表現の矛盾

はじめに，キリシタン文献の「対ス」を概観しておく。調査対象としたキリシタン文献全体では1000例に近い「対ス」が用いられており一般的な動詞であることが分かるが，以下に代表的な例を挙げる。

- この以前 Christo に対し奉りて死し給ふ数多の善人達の鏡を思ひ出だし給へ【cono yjen Christo ni taixi tatematçurite xixi tamŏ amata no jennin tachi no cagami uo vomoi idaxi tamaye】(ST 220 p 10)
- この Apostolo は Jesu Christo に対し奉りて本国をば言ふに及ばず【Cono Apostolo ua Jesu Christo ni taixitatematçurite fongocu uoba yŭni voyobazu】，天をも捨て給ひ，(ST 38 p 11)
- 例ひ殺害に及ぶといふとも，我等に対し給ひて貴き御一命を果たし給ふ御主に対し奉りて露の命を捧げんこと【varera ni taixi tamaite tattoqi goichimei uo fataxi tamŏ von aruji ni taixi tatematçurite tçuyu no inochi uo sasaguen coto】ものの数にもあらずと，諫め給へば，(ST 215 p 8)

キリシタン文献の「対ス」は必ず与格助詞「ニ」や「ヘ」に後接して用いられ，「〜が原因で」「〜に掛けて」「〜に因んで」などの意味を添えるという働きをもつ。また「日本大文典」にも「Taixi(対し)，又は，Taixite(対して)は動詞 Taisuru(対する)の分詞であって，ある人に関してとか，その人をなされる事の対象としてとかいふ意味，換言すれば，或人の為にといふ意味を示す。さうして Ni(に)を伴った与格をとり，往々また Ye(へ)を伴った与格をとる。例へば，Deusni taixitatematçuri(デウスに対し奉り)は，デウスの為にの意である。(p.522)」とあって同様のことを指摘しているが，「なされる事の対象」と「或人の為に」では，今日的な言語感覚からみて意味の差が大きいようにも思われる。

「対ス」の後接する与格助詞が人物の上下関係に関係する場合，「対ス」には多くの場合「給フ」や「奉ル」といった敬語表現が後接して，人物関係を

明確にする機能を担っている。ところが日本側の文献では「対ス」はそれほど頻繁に用いられる動詞ではなく，「梅沢本栄花物語」では0例，「延慶本平家物語」では3例(2例は漢文)，「土井本太平記」では24例，「土井本甲陽軍鑑」では31例(12例は漢文)，「静嘉堂本醒睡抄」では7例(3例は漢文)，「虎明本狂言集」では0例であり，「奉ル」などの補助動詞が下接するのは「甲陽軍鑑」のみであるなど，文献によっても傾向が異なる。

- 「晴信代に家をやぶりてハ，跡廾六代へたいし，晴信，めんもくなき次第也……」と思食てこそ，(甲陽軍鑑 1-65 o-1)
- こなたハ，勝頼公一大将にて，いはんや，御年三十歳，殊に敵にたいせは，五分一の人数なり(甲陽軍鑑 17-63 o-8)

日本側文献の「対ス」の意味はキリシタン文献とは異なり，「〜に向かって」「〜に対比して」の意味に近く，現代日本語とほぼ同一である[6]。また，まれに「が」「を」に後接して用いられた例もあるが，これらは「対峙する」の意味が強い。

敬語表現に関連してみるなら，一般の動詞については「(サ)セラル」が下接することがあるのに「対ス」にはこの表現が全くみられないことが特徴として挙げられる。

- (S. Paulo)……そのほか色々御教化させられ【Sonofoca iro iro goqeôqe saxerare】，キリシタンの中に種々の妨げ起こるべければ，その覚悟専らなりといふ儀を宣ふなり(STp 21-23)
- (Apostolo)……それより十年の間は御心のままに弘めさせられ，イスパニヤ，フランサ，イタリヤを弘めさせられ，いづれの国々にも大きに繁栄し給ふなり【Sore yori jǔnen no aida ua von cocoro no mamani firome saxerare, Hispania, França, Italia uo firome saxerare, izzure

[6] 日本側文献にはよく似た意味の動詞に「対面ス」があり，「梅沢本栄花物語」では8例，「延慶本平家物語」では13例，「土井本太平記」では16例，「土井本甲陽軍鑑」では0例(「対面ナサル」がある)，「静嘉堂本醒睡抄」では1例，「虎明本狂言集」では2例，となっている。調査対象としたキリシタン文献の「対面ス」は全体でも10例に満たない。

no cuniguni nimo vôqini fanyei xi tamŏ nari.】(STp 25-3)

これら尊敬の「サセラル」は多くが連用形であり，「対セラル」と同様に文中に現れることが多い。以下はキリシタン宗教文献について主語が神的存在[7]である文に用いられた，一字漢語サ変動詞と一般の動詞(四段動詞「為ス」は除く[8])に「給フ」「(サ)セラル(尊敬)」「(ラ)ル(尊敬)」の何れが後接するのかについて活用形別にまとめたものである[9]。

表 3 ：動詞と活用形による偏り

		給フ	(サ)セラル	(ラ)ル	小計
連用形	一字漢語サ変	119		33	152
	一般の動詞	1496	50	17	1563
その他	一字漢語サ変	186			186
	一般の動詞	5777	17	30	5824

用例全体ではその他の活用が連用形の 4 倍近いが，「(サ)セラル」「(ラ)ル」については連用形の箇所に偏って用いられる傾向がある。一字漢語サ変動詞については連用形しかみられず，152 例中の 33 例が「(ラ)ル」であるのに対して，一般の動詞は 1563 例中の 17 例が「(ラ)ル」であるに過ぎない。また，一般の動詞(一字漢語サ変動詞以外)には「(サ)セラル」がみられるのに対して一字漢語サ変動詞には「(サ)セラル」がみられない。このことから，一字漢語サ変動詞に後接する「ラル」のなかには，本来であれば「(サ)セラル」が期待される箇所に用いられたものが含まれていると推測されるのである。

以下は主語が神的存在である文に用いられた動詞「対ス」について，下接する敬語表現によって分類したものである(「対シ奉ル」は除く)。

---

[7] 「御主」「御身」〝Deus〟など神を表す主語で，キリシタン文献では最も高い敬意の対象となる。

[8] 「日本大文典」に「ナサル」と「サセラル」との敬意は同等であるという記述がある。実際には，「御～ナサル」というように「御」を伴うことが多い。

[9] 使役の「サセ給フ」など複合的な表現はすべて除外した。

表4：「対ス」に後接する敬語表現

	ST	FD	CR	GP	CD	SP	CK	計
サセ給フ 給フ	4	25	6	18	1	21	1	76
サセラル ラル	2	3	3	1	3	16	3	31

「対シ給フ」「対セラル」以外はみられない。このことは「日葡辞書」の「対ス」の項に例文として「Jesu Christo我等に対せられて，或いは，対し給ひて(p.606)」とありまた，「日本大文典」の「対ス」の解説に「他の動詞と同じく，尊敬又は卑下の助辞，Rare, tamai, tatematçuriなどを取り得る…… Jesu Christoは人に対せられ，或いは，対し給ひてCruzに掛かり給ふ，など(p.522)」とあるのに合致している。

以下の例では，「対ス」以外は「給フ」もしくは「(サ)セラル」が後接するのに反して，「対ス」だけ「ラル」が後接して他と異なった傾向を示す。

- (S. Francisco)……されば御主へ御Animaを捧げ給はんとての二年前に，先づ大きなる辛労を堪へさせられてより，Aluerniaといふ山に登らせられ，S. Miguelに 対せられ て，御家風の如く，Quaresmaを始め給へば，常よりも天の御おとづれを覚え給ひ，天のことに燃え立たせられ，深き望みを以て，Contemplaçaõの甘露に充満し給ふに，

  (ST 197 p 7)

キリシタン文献の「(ラ)ル」は，敬語表現としては「(サ)セ給フ」「給フ」「(サ)セラル」より明らかに低く位置づけられ，キリシタン文献においては最高位にあたる神的存在に対してそれ単独で敬語表現を行うことは稀である。このことは「日本大文典」に，「(ラ)ル」は「話しことば及び書きことばにおいて低い程度の敬意を示す」，「(サ)セラル」は「話しことばにおいて最も高い程度の敬意を示す」，「給フ」「(サ)セ給フ」は「書きことばにおいて最も高い程度の敬意を示す」とある(p.579)ことにも示されている。

したがって「対セラル」を「対ス」に「ラル」が下接した表現だと考える

なら，「日本大文典」は内部に矛盾を生じることにもなるだろう。

4　助動詞「サス」との不安定な承接

キリシタン文献では「対ス」に代表される一字漢語サ変動詞に下接する尊敬の助動詞「サス」がみられないが，使役の「サス」はみられる。但し，承接の仕方が一定でない。

表5：キリシタン文献の一字漢語サ変動詞と「サス」の承接

	AH	AI	ST	FD	CR	GP	DC	SP	CK	計
未然形	1			10				2		13
連用形	6	6		4				3		19
省略	1	1	1	2	1	2		4		12

以下は使役の「サス」に前接する「信ズ」の例である。キリシタン文献全体では「信ズ」未然形接続が6例，連用形接続が3例みられる。

- Deus これらを信ぜさせ給はん為に【corera uo xinje saxe tamauan tameni】，奇特不思議をのみ現し給ふなり。(FD 88-20)
- Euangelho を信ずる事はすくめて信じさする事なり【sucumete xinji sasuru coto nari】(FD 615-10)

以下は使役の「サス」に前接する「生ズ」の例である。ローマ字版本と国字写本とを併せて示す。ローマ字版本では同じ承接が近接して現れるにも拘わらず承接の仕方が異なっている[10]。キリシタン文献全体では「生ズ」の未然形接続が4例，連用形接続が1例みられる。

- 例へば，Deus 天地御製作の時，様々の花咲き，実を結ぶ千草万木を生じさせ給はん為に【xẽsŏ bambocuuo xŏjisaxetamauan tameni】，先づ大

[10] 国字写本は虫損により完全には判別できないが，問題箇所についてはローマ字版本と同一であると推定される。

地の上の水を押しのけ給ひ，乾きたる土となし給ふ如く，今も又退屈難儀等に届く堪忍を以て数々の潤沢なる善徳の果実を生ぜさせ給はん為に【quajituo xŏjesaxetamauan tameni】，(SP 120 r 16)

●喩ハ□天地御□せい作の時様々の花咲実を□ふ千草□生しさ□わん為に先大地の上の水を押退おしのけ給ひ乾き□土となし給ふ□又退屈難儀等に届く堪忍□数々の潤沢成善徳□花実を生せさせん為に(ts 42 o 11)

また，省略の例として以下を挙げておく。

●これを以て斯様なる食の類ひをDeusより無縁に与へ給ひて，自由に食させ給はん為なり【jiyŭni xocu saxe tamauan tame nari】(FD 45-3)

●勝ちたる者には寿命の木の実を与へ服させ給はんとなり【conomiuo ataye bucusaxe tamauanto nari】(CR 122-5)

これらはサ変動詞が四段動詞化したと考えることもできるが，「食ス」については以下のようにサ変動詞の活用を示すこともあるので注意が必要である。

●その身も共に泣く泣く帰り，何をも食せず【nani uomo xocu xezu】，局中に籠もり居て，Sanctaの御死去を悲しまるるものなり(ST 235-16)

以上はキリシタン文献における一字漢語サ変動詞と使役の「サス」との承接方法が不安定であったことを示している。

ここで日本側文献の状況と併せて把握しておきたい。以下に使役の「サス」が後接した一字漢語サ変動詞の活用とその例数を示す。

表6：一字漢語サ変動詞と「サス」との承接

	栄花物語	平家物語	太平記	キリシタン文献	醒睡抄	狂言
未然形	77	21	13	13	3	1
連用形			1	19		1
省略				12		

サ変動詞の省略がみられるのはキリシタン文献のみである。

未然形接続は漢語サ変動詞と「サス」の承接の仕方としては古いもので，

中古から中世にかけての文語に一般的な承接である。

- うちにはけさやかに奏せさせ給はねと(梅沢本栄花物語巻十一 4 o 7)
- 生身の大師は釈迦如来と信ぜさせ給ひて【尺迦如来ト信セサセ給テ】，日数を延べて，御幸の儀を引きつくろわせ給ふべくや候らむ」と申しければ，(延慶本平家物語三本 55 u 6)
- これらの御奇特を Deus より現し給ふ子細は，Pam の色，香，の下に真の尊体籠もり給ふと言ふ事を Anima に徹せさせ給はん為なり【Anima ni texxe saxe tamauan tame nari】(FD 611-18)

連用形接続は未然形接続に比べて新しい承接の仕方であると思われる。

- それならハいつもとゝ母の朗詠をだんじさせらるゝをきいひて(虎明本狂言集婿狂言 590-8)

キリシタン文献で，「対ス」に代表される一字漢語サ変動詞と使役の「サス」が不安定ながらも承接し，尊敬の「サス」とは全く承接しない理由の一つとして，代替表現が豊富な敬語表現に反して使役表現はとり得る表現の幅が狭いため，やむを得ず「サス」が現れたとも考えられる。使役の助動詞には「シム」もあるが，漢語動詞に後接する使役の「シム」の例は各文献 10 例前後と少なく，一字漢語動詞に後接した例は，

- (Jesus)……汝達，我と共に Tentaçam に堪忍し届けらるるによって，天の国を Deus Padre 我に任せ給ふ如く，我また汝達に任するなり。これ我が国なる飯台の上に服せしめ【fandaino vyeni bucuxexime】，Israel 十二の子孫を糺すべき台に座すべき為なりと宣ひ，(SP 162 v 14)

をみる程度である。「シム」には敬語表現が後接せず世俗的文脈で用いられることが多いのは，「甚だ下品な言ひ方であって，その中に非常に尊大ぶった気持を含んでゐて対手を甚だしく軽蔑するものである。だから，自分自身の召使に対して使ってよい(p.60)」という「日本大文典」の記述にもあるとおり，神的存在とその信者という関係に用いるのは適当でないという事情を反映したものであろう。

なお，サ変動詞の省略は二字漢語サ変動詞においてはキリシタン文献以前から頻繁にみられ，キリシタン文献も全く揺れがみられない。

● 御主 Jesu　Christo 三日過ぎてより万民に飽満させ給ふ事は【Bŏman saxetamŏ cotoua】，御身の御被官にも，Religiam の三つの願の後，御寛恕をなし給ふと言へる儀なり。又御主は聊かの事にても人を飽満させ給ふぞ【bŏman saxetamŏzo】(SP 301 v 07)

キリシタン文献では，尊敬の「サセラル」自体は少ないながらも用いられるが，二字漢語に下接する尊敬の「サセラル」が殆どみられない。その理由は「御○○ナサル[11]」(前期のキリシタン版では「○○ナサル」もみられる)という表現が非常に多く，これが「サセラル」を代替しているためと思われる。

● (Jesu Christo)……また洛中へ入り給へば，すなはち Templo へ御参詣なされ【Temploye gosanqei nasare】，商売を以て Templo を汚したる者共を追ひ出だし給ふ事を観ずべし(SP 122 v 14)

「御○○ナサル」の「ル」の活用形は連用形が多く，「サセラル」と同様に文の途中に現れることが多い。神的存在を主語とする文について，「スピリツアル修行」ローマ字版本の「御○○ナサル」は連用形が 80 例，それ以外の活用が 70 例となるが，「(御)○○給フ」については連用形 12 例，それ以外の活用が 52 例となっており，傾向は大きく異なる。したがって，文中で連用形が要求される位置については，文末位置に多い「給フ」ではなく，「ラル」を用いた「御○○ナサル」が出現し易いということができる。

しかし，一字漢語については「御○ナサル」という表現自体を行わないものが多く，「御対ナサル」はみられない。したがって一字漢語に下接する「サセラル」が表現上要求されるものの，承接方法についての理解が不足したために「対セラル」というかたちでやむなく代替することもあったと考えられるのである。

5　おわりに

キリシタン文献の「対ス」はいくつかの点で日本側文献にはない特徴を示

[11] ○二つは二字漢語，○一つは一字漢語を示す。

しているが，助動詞「サス」「ラル」との承接に関連して，

- 「スピリツアル修行」国字写本では「対セラル」を「被為対」と表記するが，「為」はこれ以外の箇所では「(サ)ス」を表記するために用いられている。
- キリシタン文献の「ラル」は敬語表現としては弱く低位の主語を待遇するのが通例であるが，「対セラル」に代表される一字漢語サ変動詞については最高位の主語を待遇する「ラル」が頻出してこれと一致しない。
- キリシタン文献の「対ス」と「サス」の承接方法は不徹底であり，「サス」の使用にあたって混乱が生じた可能性がある。

ことが指摘される。キリシタン文献においては「対ス」に「ラル」が後接した「対セラル」を「サセラル」に代わる表現としてやむなく用い，これを国字写本の筆写段階で所謂二重敬語の「サセラル」として例外的に解釈した結果，「被為対」という表記に至ったと考えられるのである。

調査資料

天理大学附属天理図書館蔵「スピリツアル修業」国字写本（マイクロ複写）
近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版 1999
大塚光信・来田隆編『エソポのハブラス　本文と総索引』清文堂 1999
H.チースリク・福島邦道・三橋健解説『サントスの御作業』勉誠社 1976
鈴木博編『キリシタン版ヒイデスの導師』清文堂 1985
松岡洸司・三橋健解説『コンテムツス・ムンヂ』勉誠社 1979
近藤政美編『ローマ字本コンテムツス・ムンヂ総索引』勉誠社 1979
天理図書館善本叢書『きりしたん版集一・同附録』天理大学出版部 1976
豊島正之編『キリシタン版ぎやどぺかどる　本文・索引』清文堂 1987
小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』風間書房 1971
林田明『スピリツアル修行の研究　影印・翻字篇』風間書房 1975
土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』三省堂 1955
土井忠生・森田武・長南実『邦訳　日葡辞書』岩波書店 1980
高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語　本文と索引』武蔵野書院 1986
北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語　本文篇・索引篇』勉誠社 1990
西端幸雄・志甫由紀恵『土井本太平記　本文及び語彙索引』勉誠社 1997

岩淵匡・桑山俊彦・細川英雄編『醒睡抄　静嘉堂文庫蔵　本文編・索引編』笠間書院 1998・2000
池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究　本文編』表現社 1983
笹野堅編『古本能狂言集』岩波書店 1943
北原保雄・土屋博映『大蔵虎明本狂言集総索引』武蔵野書院 1985

参考文献

[1] 石塚晴通・豊島正之(2000)「天理図書館蔵「スピリツアル修行鈔」写本」『ビブリア』113
[2] 石塚晴通・豊島正之(1995)「東洋文庫蔵「スピリツアル修行」国字写本」『東洋文庫書報』27
[3] 白井純(2002)「キリシタン宗教文献における上位待遇表現の変遷 ── 文法的側面からの検討 ──」『北海道大学文学研究科紀要』108